

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月18日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530928

研究課題名（和文）ニューカマー児童生徒の音楽的アイデンティティ形成の実態を踏まえた音楽教材の開発

研究課題名（英文）Music material development based on the research on the musical identity formation of Japanese-South American children in Japan

研究代表者

杉江 淑子（SUGIE YOSHIKO）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：30172828

研究成果の概要（和文）：複層的な文化的背景をもつ日系ニューカマーの子どもたちの音楽的アイデンティティ形成の実態を質問紙調査や聞き取り調査を通して探るとともに、ブラジル等の子どもの歌の収集と分析を行った。質問紙調査や聞き取り調査の結果からは、母国の歌を自分の子どもに覚えてほしいと考える保護者世代と、日本のマス・メディア等の影響を多大に受けて育っている子どもたちとの間に大きく異なった音楽的アイデンティティ形成の様相がみられることが推察できた。

研究成果の概要（英文）：Firstly, we investigated about how the musical identity of Japanese-South American children, who are so-called newcomers in Japan, was formed through questionnaires and interviews. Secondly, we collected and analyzed the playing songs of South American children. According to the interviews, parents wanted their children to know the songs of the homeland. However, we found that there were some differences in the musical identity between the parents and the children who are growing up in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：音楽教育学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：ニューカマー、国際理解教育、音楽的アイデンティティ、外国人児童生徒

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ニューカマーズと呼ばれる在留外国人の数は1980年代後半以降増加し続け、日本の義務教育年齢にあたるニューカマー外国人の子ども数も急増した。ニューカマー児童生徒の在籍する日本の学校では、言語領域に

おける指導、および認知的教科の領域における指導や支援が主に行われている。しかし、ニューカマーの子どもたちの文化的アイデンティティの形成には、こうした言語的、認知的な領域だけでなく、感性に直接関わる音楽等の非言語領域が深く関わっている。しかしな

がら、ニューカマー児童生徒が保有する音楽文化や音楽に対する感性は可視的でないだけに、言語領域や認知的領域に比べて教育の場では等閑視されやすく、研究対象としても日本ではほとんど取り上げられていない。

(2) 歴史的な大量移民受け入れ国であるオーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国や、第2次世界大戦後、先進後進の差はあれ、移民受け入れ国となったヨーロッパ諸国においては、音楽教育の分野においても多文化教育の研究が行われている。

(3) 日本においても、多文化的な視点に立った音楽教育のための教材開発や指導方法について、示唆に富む研究や実践の提案が行われてきており、今後は、こうした研究成果に加え、ニューカマー児童生徒の在籍する学校という具体的な環境を念頭においた研究が進められる必要がある。

## 2. 研究の目的

(1) 複数の文化的背景をもつニューカマー児童生徒が、日本の学校や学校以外の日常生活の場で、どのように自己の音楽的アイデンティティを形成していくのかについての実態と課題を明らかにする。

(2) 具体的な状況に即した小中学校音楽科および国際理解教育のための音楽教材の開発に取り組む。

## 3. 研究の方法

(1) ニューカマー児童生徒の音楽的アイデンティティ形成過程の実態と課題に関して

① 先行研究に基づく、日系ニューカマー児童生徒の歴史的背景についての考察

② ニューカマー児童生徒を対象とした音楽との関わりに関する質問紙調査（楽曲を聴取して回答する質問を含む）

③ 国境を越えた移動経験者（保護者世代等）への聞き取り調査

(2) 音楽教材の開発に関して

① ニューカマー児童生徒の母国における遊び歌の収集

② 収集したニューカマー児童生徒の母国の遊び歌の分析

④ ニューカマー児童生徒の母国のテレビ等子ども向け音楽番組の考察

## 4. 研究成果

(1) ニューカマー児童生徒の歴史的背景

現代の日本に暮らす日系ニューカマーの子どもたちにつながりを持つブラジル等、南米社会における日系人の生活や子弟教育の

変遷を、主に『ブラジル日本移民百年史』第3巻（生活と文化編(1),2010,風響社）所収の森脇礼之・古杉征己・森幸一「第3章 ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」に依拠して辿った。

日本から南米への移民史を振り返ると、1920年代から40年代頃までが最も移民人口の多い時期である。したがって、現在の日本の学校に通う日系ブラジル人や日系ペルー人等の子どもの場合、彼らの父親・母親の祖父母の世代が日本からの移民、すなわち日系一世としてブラジルやペルーに移住したケースが多く、子どもたちの父親・母親の世代が日系三世、子どもが多くが日系四世ということになる。そして、1950年代初頭までの間に学齢期を過ごした日系二世、すなわち子どもたちの祖父母の世代は、1930年代のブラジル・ナショナリズムの高揚、1938年のエスタード・ノーボ(Estado Novo)体制確立後強化されたブラジル社会への同化・国民化政策にもとづく教育政策、日本語教育禁止措置などの状況により、日本語からポルトガル語へと使用言語が大きく移行した世代である。

戦後「外国語使用禁止令」が解除され、外国語教育の実施規制が緩和されたことを受けて、日本語学校が再び開校され始めるが、これらの学校への通学や日本語習得は保護者や子どもの任意性に基づくものであり、日本語の学習は個別的なアイデンティティに関わる選択の問題であると位置付けられた。こうした経緯の延長線上で、1970年代、さらに80年代には、ブラジルの日系家庭から日本語が加速的に消失し、日系人だから日本語学習が必要というとらえ方は薄れ、日系人、非日系人を問わず、日本や日本語に関心を示すのは、現代の日本文化、例えばアニメや漫画、J-Popなどに関心を持つブラジル人であるという調査結果も報告されている。

(2) 国境を越えた移動と音楽的アイデンティティの形成

日本に在住する日系三世の調査協力者に、日本人移民三世としての背景や出身国での生活、日本に来てからの経験、子どもの教育についての保護者としての考え方などについてインタビューをした。

①ペルー出身 Nさんの事例

Nさんはペルー出身の日系三世である。Nさんの祖父が1906年頃に広島からペルーに移民として移住し、ペルー人と結婚した。祖父はスペイン語を話し、配偶者がペルー人であったことから、家庭内の会話は専らスペイ

ン語であったらしい。Nさんの父が幼いときに祖父が亡くなったこともあり、Nさんの父の成育過程における言語環境はスペイン語であり、Nさん自身も完全にスペイン語の言語環境で育った。

Nさんが日本に来たのは20年ほど前、20歳の時であるが、当時、日本語はまったくわからず、ゼロからの出発であった。

来日後、日本人と結婚し、2人の子ども（5歳男児と小学校4先生の女兒）がいる。子どもには日本語はもちろんであるが、スペイン語を覚えてほしいし、ペルーの歌や音楽なども覚えてほしいと思っている。Nさんは、CDやDVDなどで子どもたちにスペイン語を学ばせており、小学校4年生の長女はかなり話すことができるとのことである。Nさんの運転する車にはペルーの子ども向け音楽案組のCDが積んであったが、おそらく子どもが車に同乗するときなどにそれらのCDを聴かせているのであろう。

## ②ブラジル出身 Tさんの事例

Tさんは日系ブラジル人三世である。Tさんの祖父がブラジルに移住し、ブラジル人と結婚した。Tさんの父は、1938年にサンパウロに生まれた。祖父の配偶者がブラジル人であり、またNさんと同じく、父が小さいときに祖父が亡くなったので、家庭ではポルトガル語が話されていた。この点も、Nさんの場合とよく似ている。ただし、父と年の離れた伯母がいて、その伯母は日本語を少し話したとのことで、家庭の中に若干は日本語を耳にする機会はあったようである。

Tさん自身は完全にポルトガル語の言語環境で育ち、1992年に日本に来た時には、日本語は殆どできず、また日本に対するイメージも殆どわからなかった。

音楽に関しては、ブラジルでは学校の教科として置かれていなかったが、日本では学校の教科として設けられていて、鍵盤ハーモニカやリコーダーまで習うのはすばらしいことだと思うというのがTさんの感想である。

一方、ブラジルでは、音楽は、ラジオ、テレビを通して、さらには地域社会の中に豊富に存在しており、地域の人々が集まって楽器を演奏する場や機会もある。さらに最近では、子どもたちの逸脱行動を防止する目的もあって、ボランティアで楽器を教える場が地域に設けられたりしている。カーニバルは最も大きなお祭りであり、エスコラ・デ・サンバのチームに参加して皆が踊る。冬（7月）にもお祭りがあり、そのお祭りでは温かいワインを飲んで楽しむとのことである。

Tさんのブラジルでの日常生活では日本の文化を感じる場面は殆どなかったが、唯一、お正月だけは、Tさんの家庭では日本的な習慣にのっとり行われていた。

Tさんも日本人と結婚し、子どもは2人（5歳と小学校5年生）である。家庭では日本語を使っているが、子どもたちにはブラジルの言葉や音楽も覚えてほしいと思い、ブラジルの子ども向け音楽番組のビデオなどを見せて学ばせている。Tさん自身はカラオケでブラジルの歌を歌うことがあるとのことであった。Tさんは、ブラジルの子どもの伝承歌を数多く知っているが、こうした歌はいずれも遊びの中で覚えたように思うとのことであった。

## ③ブラジル生れ Iさん（日本国籍）の事例

次に、国境を越えた移動を家族で経験した事例として、移民としてではなく、父親のブラジル日本企業赴任に伴い、家族がブラジルに移住したIさんの事例を考察する。1965年にブラジルで生まれ、22歳で日本に帰国したIさんからは、ブラジルでの生活、日系企業の日本語学校とブラジルの公立学校、ブラジルでの音楽との関わり、ブラジルの若者社会と音楽、日系人社会の音楽文化、テレビの日本語放送、言語習得に関する事などについて、話を聞いた。移民としての移住ではないために、いわゆる日系ブラジル人の生活心情とは異なる点が多かったと推察されるが、それだけに客観的にブラジル社会の音楽文化や学校の様子などについて聞くことができたと考える。

Iさんが最初に住んでいたサンパウロ州のI市は日系人が多く、日系の青年会とか日系人だけのグループがあり、日本の料理を作ったり、日本映画を観たり、華道教室が開かれたりしていた。

Iさんはブラジルの公立学校と日系企業が設置した日本語学校の両方に通っていた。ブラジルの学校は2部、ときには3部に分かれていて、午前中にブラジル学校に通う場合は、午後に日本語学校に行く（逆もあり）という生活であった。ブラジル学校では当時は「音楽」は教科としては置かれていなかった。ブラジルの国歌や国旗の歌など、独立記念日などに歌う歌を習った記憶はあるが、それらは音楽の教科ではなく、朝の時間などに練習していたように思うとのことであった。

学校では音楽の教科はなかったが、ブラジル社会では、子どもが小さい頃から、家庭や地域社会で音楽が常に鳴っている。ギターが大変上手な人などもいて、どこに行っても音

楽が鳴っているのが、皆が、自然な形で歌を歌い、踊ることができる。少なくともIさんの子どもの頃はそういう雰囲気だったという。さらに、ブラジル社会には、町のイベントとしてカーニバルがあり、その時期に合わせてダンス・チームが各町につくられ、小さい子どもから大人までが練習に励む。カーニバルの季節が近づく2～3月は、町中、練習の音でうるさいぐらいである。わざわざ時間をつくるというよりも、練習したい人が集まって皆で練習するという感覚である。

週末には会員制のクラブもあり、昼間には子どもの部や青年の部が設けられ、ダンスをしたり、音楽を演奏したりして、楽しく過ごす。そして大人は夜に楽しむといったようなクラブの文化がある。

日系人社会の音楽文化としては、日系人協会主催の運動会とか文化祭のようなイベントがあり、そうした中には日本舞踊や盆踊りをする方々がいて、Iさんも〈さくらさくら〉の踊りを教えてもらって、発表したことがある。日本の文化に触れる場合は、運動会、映画会、のど自慢大会などで、日系人協会は活発に活動を行っていた。

日本語の歌は、Iさんの場合、日本から送ってもらった童謡のレコードなどを幼い時に聴いていたので、その時に聴いた歌は今でも歌える。また、Iさんの父は演歌をよく聴いていたので、それらの歌をIさんもよく覚えているし、当時の日本のアイドル歌手などの歌もレコードやテープレコーダーで聴いていたので、覚えているとのことである。

このように、Iさんの場合、ブラジルで生まれ育ち、22歳までブラジルで生活したが、父・母を通して、家庭の中に日本の音楽文化に触れる環境が身近に存在しており、先のNさん、Tさんの事例とは大きく異なることがわかる。それと同時に、Iさんが生まれ育った時代のブラジル日系人協会の存在の影響を大きく受けた日系ブラジル人と、おそらく先のNさん、Tさんのようにさほど影響を受けていない日系ブラジル人が存在することも推察できる。日本に移住している日系ニューカマーの子どもたちとのつながりをお考えするときには、個々の背景をより丁寧に考察する必要があるといえよう。

### (3) 日本の学校に通う日系ニューカマーの子どもと音楽

日本の学校に通っているニューカマー児童生徒が日常生活の中でどのような音楽を聴いたり歌を歌ったりしているかを知るために、音楽の聴取を伴う質問紙調査を実施し、

分析した。調査実施日は2011年8月で、S県K市の公立小学校に通う計25名の外国人児童生徒である。調査内容は、①好きな教科、②好きな音楽や歌、③知っている歌・聴いたことのある歌(聴取による)についてである。調査項目のうち、③の聴取による調査結果は下図に示すとおりである。

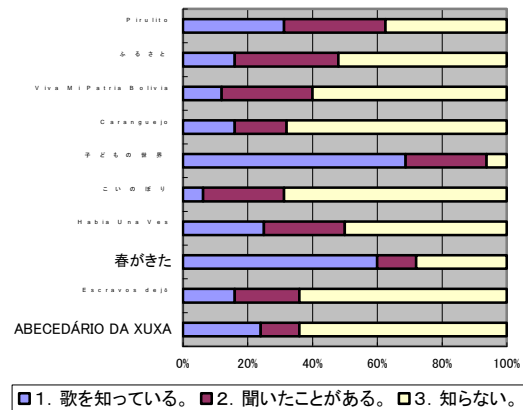


図 聴取による調査曲目の回答結果

回答結果から、多くのニューカマーの子どもたちにとっては、日本の文部省唱歌は学校で習うことにより初めて知ることのできる歌であるといえる。ブラジルの遊び歌については、多いとはいえないが、家庭である程度は伝えられていることがわかる。ブラジルの子ども向け人気テレビ番組「XUXA」で歌われている〈ABECEDÁRIO DA XUXA〉は、25名のうち6名が「歌を知っている」、3名が「聞いたことがある」と答えており、「家族」から知った者4名、「テレビ」から知った者3名であった。ブラジルの子どもの歌については、いわゆる伝承的な遊び歌だけでなく、テレビ等で放映されている現代の子ども向けの歌を耳にする機会もある程度あり、受け入れられているのではないかと思われる。

好きな歌・音楽についての回答結果から日系ニューカマーの子どもたちの音楽的環境をとらえると、多くの日本人の子どもと同じく、テレビ等のマス・メディアを通しての音楽の影響力はきわめて大きい。それに加えて、ニューカマーの子どもたちの場合、出身国のポピュラー歌手やアメリカ、カナダのポピュラー歌手など、日本語以外の言語で歌われる歌への嗜好の広がりもあるように思われる。

一方、出身国の子どもの伝承歌、遊び歌など、マス・メディアにはのらない歌については、家庭の中である程度は伝えられようとしている。出身国の音楽文化を少しでも伝えた

いという保護者の思いがそこには現れている。しかし、子どもの遊び歌は、実際には集団での遊びとともに伝承されていくものであり、そうした場がないままに歌だけを伝えようとしても、その魅力や面白さは十分には伝わり難い。ブラジルには、子どもの遊び歌が豊富に存在する。そうした遊び歌の中には、日本の遊び歌と遊び方の点で共通性をもつものも含まれる。また、教材として音楽的に魅力的な遊び歌も存在する。こうした歌を外国人児童生徒が在籍している日本の学校に取り込むことにより、日本人の子どもとニューカマーの子どもの共通の音楽財産としていくことができるであろう。さらに、ブラジルの子ども向けテレビ音楽番組の中にも興味深い歌が紹介されている。こうしたビデオやCDの貸し出しをしたり、子どもが自由に視聴できる場を設けたりすることも考えられてよいのではないだろうか。

#### (4) まとめと課題

本研究では、複層的な文化的背景をもつニューカマーの子どもの音楽的アイデンティティ形成について、幾つかの方向から探ることを試みた。質問紙調査や聞き取り調査の結果からは、国境を越えた家族移動に伴った親世代の思いが垣間見え、子どもたちの出身国の豊かな音楽文化の存在も知ることができた。今後、収集したブラジル等の子どもの遊び歌が具体的にどのような遊びを伴って歌われてきたのかを探るとともに、子ども向け音楽番組の中で歌われる比較的新しい歌についてもさらに収集し、子どもたちの文化的背景を活かした音楽科の教材や授業の提案につないでいきたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 杉江淑子、子どもや若者の「聴く力」と読譜の役割、音楽教育実践ジャーナル、査読無、2009、pp.6-16
- ② 杉江淑子、日本の学生文化にみる「異文化」音楽の受容—1930年代、60年代、90年代以降—、日本音楽表現学会編『音楽表現学のフィールド』、査読無、東京堂出版、2010、pp.118-127
- ③ 杉江淑子、音楽科教育と教科書—教師にとつての音楽科教科書—、音楽教育実践ジャーナル、査読無、Vol.9-2、2012、pp.30-37

〔学会発表〕(計1件)

- ① 杉江淑子、1930年代前後のレコード音楽の受容—教養書、レコード雑誌、レコード・コンサ

ートにみる—、日本音楽表現学会第9回大会、2011年6月12日、上越教育大学

〔図書〕(計1件)

- ① 杉江淑子、平成21～23年度科学研究費研究成果報告書、ニューカマー児童生徒の音楽的アイデンティティ形成の実態を踏まえた音楽教材の開発、2012、42

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉江 淑子 (SUGIE YOSHIKO)  
滋賀大学・教育学部・教授  
研究者番号：30172828